

2017年度卒業論文紹介

その他のタイトル	Vorstellung einiger Diplomarbeiten 2017
雑誌名	独逸文學
巻	63
ページ	131-135
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018680

2017年度卒業論文紹介

小西 優貴

混交する言語とアイデンティティ

—ドイツにおけるドイツ語とトルコ語のコード・スイッチング—

近年移民国家として成熟しつつあるドイツ連邦共和国であるが、この国が今の国家の在り方に行き着くまでには多くの移民統合に関する(言語の)問題が、特にトルコ系移民を背景に持つ人々を中心に、常にあり続けてきた。この移民統合における問題は、それが何世代目の移民を対象としているかでその性質が異なる。本論で対象としたトルコ系移民二世では、彼らの抱えた言語とアイデンティティの問題が「喪失世代」(Verlorene Generation)という言葉と紐づけられて、頻繁に取り上げられてきた。この「喪失」という表現には、トルコ系移民二世の一部が直面した「母語の喪失」及びそれに伴う「アイデンティティの喪失」という意味が込められていると考えられる。

この「喪失」を象徴するかのような例として、1995年にトルコ系移民二世の Murat Güver がある雑誌に投稿した一遍の詩¹がある。„Fühle mich berbat“ という一節から始まるこの詩では、自身がドイツ語とトルコ語という二つの言語を織り交ぜて話してしまうことへのコンプレックス、そしてそれに起因する母語喪失感とアイデンティティの揺らぎが、全編に渡り両言語を織り交ぜられながら描かれている²。

本論では、ドイツにおけるトルコ系移民二世の子供が不完全言語使用(Halbsprachigkeit)に陥っていたのではなく、彼らの言語優勢(Sprachdominantz)が入れ替わっただけである、という Hespöyler /

1 Bizim Almanca-Unser Deutsch, 53 (August 1989) in: San, Maksut 1995

2 例えば、冒頭の „Fühle mich berbat“ は „Fühle mich“ (ドイツ語で「私は感じる」)と、„berbat“ (トルコ語で「みじめな」)から構成されている。

Liebe-Harkort の調査結果³を受け、「Güver は詩の中で描いたのに反して、実際は両言語において十分な言語能力を有していた」のではないかという仮説を立て、これを言語接触現象の一つである「コード・スイッチング」の理論を足掛かりに分析した⁴。なお、Güver の詩の分析には Torgut Gümüşoğlu が考案した „ein Integrationsmodell für deutsch-türkisches Code-Switching“（ドイツ語とトルコ語のコード・スイッチングのための統合モデル）⁵を使用した。

彼のモデルでは、「正しい、あるいは妥当な言語のミックス」と「文法的に誤った文」が明確に区別されている。さらに、彼はモデル考案の傍らで、コード・スイッチングを行った話者の言語能力の測定を並行して行っている。この話者達の言語能力が、それぞれの言語の母語話者と比較して大きな差がなかったことから、彼はコード・スイッチングという現象が、言語能力が不足していることに起因するものであるとする説を否定し、むしろこれに高い言語能力が必要であるとする姿勢を取っている。したがって、Gümüşoğlu の論を採用するのであれば、Güver の詩における現象が Gümüşoğlu のモデルに則って「正しい言語のミックス」であると判断できる場合、本論において立てた仮説は（少なくとも部分的には）証明できると言える。

実際に分析を行った結果、Güver の詩で見られた言語接触現象のごとくが Gümüşoğlu のモデルにおいて「正しい、あるいは妥当な言語のミックス」であり、文法的に誤りだと考えられる文がないことが確認できた。ここから「Güver の言語能力は、少なくとも詩から読み取れる自己評価ほど低いものではなかった」という結論を出すことができるだろう。

3 Vgl. Hepsöyler, E. und K. L. Liebe-Harkort: *Muttersprache und Zweitsprache*. Frankfurt a. M.: Peter Lang GmbH, 1991.

4 本論で「コード・スイッチング」として扱う現象は、文ごとに言語が切り替えられる「文間コード・スイッチング」ではなく、一つの文内で複数の言語が混ざり合う「文内コード・スイッチング」である

5 Vgl. Gümüşoğlu, T.: *Sprachkontakt und deutsch-türkisches Code-Switching. Eine soziolinguistische Untersuchung mündlicher Kommunikation türkischer MigrantInnen*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2010.

本論の問題点を挙げるならば、それは Gümüüşöglü のモデルをそのまま詩の分析に応用したことだろう。このモデルは本来グループ会話の録音によって取られたデータをもとにして作られたものである。コード・スイッチングとはそもそも「会話」内における「散発的」な事象であり、「計画的」に「書かれた」詩とはその性質が大きく異なる。そのため、この互換性を確かめることなくモデルをそのまま応用したことは問題であると言わざるをえないのである。

だが、この課題点から新たな発想を得るという思わぬ収穫もあった。それは「オンラインチャットにおけるコード・スイッチングの実態」はいかなるものか、という問いである。「スピーキング」と「ライティング」の中間とも言えるこのフィールドにおいて、そもそもコード・スイッチングは起こるのか、起こるのであれば、それは実際の会話におけるコード・スイッチングと同様のルールに従って起こるのか、これまでのコード・スイッチングの理論はどれほど応用可能なのか、など疑問点は尽きない。ここで挙げた問題点及び以上の疑問点の解消を今後の課題としたい。

藤原 裕貴

『賢人ナータン』における「人間性の宗教」

レッシングの『賢人ナータン』 „*Nathan der Weise. Ein dramatisches Gedicht in fünf Aufzügen*“ は、ドイツ文学史における名作である。この劇詩の一番の山場は、主人公のユダヤ人ナータンが語る「三つの指輪」の話である。レッシングはこの話で、我慢 (Ertragen) や忍耐 (Erdulden) を超えた宗教的寛容、すなわち「人間性」(Humanität) の宗教を説く。この論文では、「三つの指輪」の話、登場人物の人間性、摂理、レッシングの神概念に注目し、レッシングの「人間性」の宗教について考える。

『賢人ナータン』に書かれる「三つの指輪」の話は、ボッカッチョの『デカメロン』第一日第三話を参考にしている。両者を比較すると、宗教に対する姿勢の違いが大きいことが分かる。レッシングが宗教を積極

的に批判しているのに対して、ボッカッチョの批判は消極的である。また両者の違いは話の形式にも見られ、裁判官の忠告の場面はその代表である。レッシングは裁判官を通して「三つの指輪」すなわちユダヤ、キリスト、イスラムの三宗教の融和を説く。注目すべきは、指輪の力が必ず発揮されるとは言っていないことである。レッシングは、指輪の力を発揮させるための努力や過程に重きを置いている。レッシングにとって指輪の真贋、つまり真の宗教がどれかと言う問題は、人間が決めることではなく、神の権能に属することである。

「三つの指輪」の話は、『賢人ナータン』の全体と密接に繋がっている。ナータンは登場人物の中で最も高い段階で人間性を体現しており、他の登場人物の人間性を向上させる「教師」(Erzieher)である。彼に次ぐ者に、キリスト教の神殿騎士とイスラム教のサラディンがいる。ナータンは初めから優れた人間性を備えていたわけではない。彼はかつてキリスト教徒に家族を殺され、それ故にキリスト教徒を憎んだ経験がある。しかし理性を取り戻した彼は、全てが神の摂理であると悟り、自らの理性が神の摂理に沿うように行動し始める。それがレーハの養育である。レーハはキリスト教の子だった。しかしナータンは彼女に、殺された息子たちの分の愛情を注いだ。彼の行為は「汝の敵を愛せ」というキリスト教の最高の戒めの実行である。劇中でナータンは修士に「本当のキリスト教徒だ」と讃えられる。この「キリスト教徒」について、筆者は、レッシングが晩年の著作『キリストの宗教』„*Die Religion Christi*“で挙げた「キリストの宗教」(die Religion Christi)の体現者であると考ええる。「キリストの宗教」は、キリストを人間以上の存在とし、彼を崇める「キリスト者の宗教」(die christliche Religion)ないしキリスト教とは区別され、キリストが人間として行った宗教である。またレッシングは父親への手紙で、「汝の敵を愛せ」の遵守が、「真のキリスト教的な愛」で、その実践が真のキリスト教徒の本質的標徴だと述べている。「キリストの宗教」は「人間性の宗教」と近いものであり、それを実践しているナータンは「本当のキリスト教徒」なのだと考えられる。ナータン、神殿騎士、サラディンの善行は、第5幕最終場の大団円という形で結びつく。異なる宗教を信じる者たちが抱擁し合うこの場面は、「人間性」の宗教により到達する可能性であり、「終末論的展望」である。

レッシングが晩年神についてどのように考えていたか。彼の死後、それについてモーゼス・メンデルスゾーンとヤコービとの間で論争が起こった。それが「スピノザ論争」である。この論争の発端は、レッシングがヤコービとの会話で、自身がスピノザ主義者であると仄めかす発言をしたことである。ヤコービはレッシングがスピノザ主義者だったと主張し、メンデルスゾーンはそれに反対した。レッシングは、自らがスピノザ主義者であるとは言っていないが、「一にして全」(Hen kai pan!)という言葉で、当時の「正統的な神概念」の対立概念として持ち出した。彼の神の概念については様々な解釈があり、簡単には決められない。いずれにせよレッシングが正統的な神概念と対立する神概念を持っていたことは、事実であると考えられる。

レッシングの「人間性」の宗教は、理想的な考えである。しかし彼のこの思想が実現されることは困難である。レッシングが批判したキリスト教は、イエスの、ユダヤ教の律法主義への批判として生まれた。しかし時代が進むにつれて、イエスが行った「キリストの宗教」は「キリスト者の宗教」に変化してしまった。「人間性」の宗教もまた同様の道をたどる可能性がある。レッシングの「人間性」の宗教は、理想的である反面、宗教的で空想的な思想である。

